

まんだら通信

第179号(通巻210号)

平成23年(2011)05月 佛誕2577年 皇紀2671年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



やおよろず 八百万の神様と

中学を卒業した翌年三月初め、このお寺に弟子入りしましたから、ちょうど十年過ぎたことになりました。
神余の自性院の御前さま、良俊僧正がお釈迦さまの代理の戒師をして下さり、他のお坊様がそれぞれの役をお勤めになつて、質素な中に古式通りの厳かな得度式をさせてもらい、晴れてお釈迦さまの教団の末席に連なることが出来ました。而も弘法大師空海、お大師さまが天才的なお考えで、日本人にピッタリの真言

密教という新しい仏教を組み立てた、その宗派だったのですから、掛け値なしに有難いと思っています。

「世の中のものには、すべて仏様が宿っているのだから、ほんとうは要らないものや悪いものは、なんにもないんだよ。」ということですね。

例えば「何を間違つて、こんなブスで気の利かない女と夫婦になつたんだらう」と思っている男性がいたとしましょう。

あなたのその奥様は、実は観音様の化身なんですよ、ということですね。

残念なことに、師匠は次の年に亡くなりましたから、この世で教えを受けたのはわずか一年でした。

その師匠は、朝、井戸端で顔を洗い終わると、東に向かつてかきわ手を打ち、朝日を拜んでいました。

部屋に入ると、庫裡の小さな神棚にお茶を供え、同じようにかしわ手を打つてお祈りをしてから、本堂に行つて勤行をしました。

数年前お亡くなりになつた、白間津、海雲寺さまのご老僧は、私がお塔婆の配達に行くとき、生粋の房州弁で「おお、久し振りだあ。上がつてお茶でも飲んでいがつしええ」とおっしゃつて昔話を聞かせて下さいました。

昔は、太陽などと呼び捨てにせず、「おてんとさま」と呼んだこと。
お天気のこと「今日も降らつしやる」とか「今日はよう降り続いたり、からからの晴れ続きでも、決して悪し様には言わなかつたこと、など。

私が育つた農家でも、手洗場(トイレ)には手のない神様がいますから、汚してはならないと躰けられましたし、毎朝晩、神棚や仏壇に線香を上げる時には、囲炉裏の隅にお線香を供えました。

このように日本には八百万の神様がいて、山にも川にも村境の巨木にも、畏れ敬まう気持ちを感じてきました。

それは「人間の知恵を超えた大きな力に活かされている」という謙虚な思い」ともいえるでしょう。

この「謙虚さ」という思いを、私たちは普段は気付いていないけれども、丁度地下水脈のように、間違いない私たちが心に持つている、日本人の美德だと思ひます。

この心が、今度のような、貞観地震以来千百年に一度という大きな災害であつても、「他人の不幸を黙つて見て行かない」、「みんなの手をつないで復興しよう」という形になつて現れるのです。

五日から一泊で福島に行つてきましたが、私たちが同じ宿に泊まつたご夫婦は川崎に住まいだそうですが、三陸のご親戚のお見舞いに行つたそうです。

ご親戚は避難所暮らしのことですが、夜になると泥棒が出るので、旦那さんは壊れかけた自分の家に、野球のバットを持って泊まりに行くのだそうです。

ごく稀なことかと思つたら「新聞やテレビは余り言わないけれども、結構多いそうです」という返事でした。

そういう不心得者もいますが、旅館で見たテレビではボランティアが多すぎて断つている程だそうで、一休みしたサービスマンには、被災地に行く自衛隊や警察の人たちがいっぱいでした。

時間がかかるかも知れないけれども、謙虚な心を忘れずに地震に負けない復興を進めれば、千年後の子孫達が、さすがこの国のご先祖達は素晴らしかつたと感謝してくれることでしょう。

◆風薫る皐月という言葉がありますが、今年は暖かになる日が遅れているようです。先日買った日本サクラソウの花芽が漸く開き、これも今年初めてのカザグルマという日本原産のクレマチス(鉄線ともいいますね)もやっと昨日咲きました。
◆上にも書きましたが、福島の土湯温泉の近くの、ミズバショウとカタクリを見に行つてきました。泊まつたのは20分ほど離れた高湯温泉の、「ひげの家」というこじんまりした旅館でした。
どちらの花も盛りを過ぎていましたが、何とか写真にはなりました。

来年は、連休前の花盛りに行きたいと思ひます。
雪解けを待っていたかのように芽生え、春の暖かな風とともに、小首をかしげて一斉に咲く姿は可憐そのものです。
草丈は10センチ足らず。
◆いつもの年なら3月までには来日のアンギラサお坊様が、福島原発の放射能の心配から、飛行機のキップが手に入らず、4月半ばに漸く佐原のスリランカ寺に着きました。
お出でになつてすぐ、東北地方の被災地に救援活動に行きました。あちらで集めた義援金は地元

の役所に届けましたとメールがありました。
10年近く前、スリランカもスマトラ沖地震の大津波で大きな被害があり、日本からも救援に行きましたからそのお礼の気持ちでしょうか。
◆土地の人ならどなたも知っている、ハマヒルガオの写真にしました。30年ほど前まではハマエンドウやミヤコグサなどが、足の踏み場もないほど咲きましたが、海岸に道路が出来た頃からは、目立って少なくなりました。年によって違いますが、今年は特に少ないようです。



余滴

2011/05/09 龍渉

インターネットで見つけたお話

その一

船長はただ黙ってうなずいていた

津波で家ごと流された岩手県大船渡市の会社役員、金野健一郎さん(37)は、たんすにつかまり大船渡湾を漂っているところを小型船に助けられた。

船長の男性は、名前や住所を頑として名乗らなかつた。金野さんは「船長の恩は一生忘れない。落ち着いたら捜して、もう一度お礼を言いたい」と話している。

地震が起きた11日、金野さんは公民館にいったん避難したが、スーツから着替えるために港から約300メートルのところにある自宅に引き返した。

二階の窓から外を見ると、「真つ黒な波が渦を巻いて迫ってきた」。みるみるうちに二階まで浸水。倒れて浮いていたたんすの背に必死にしがみついた。

そのまま天井まで約30センチのところまで浮き上がると、「バキバキ」と音をたてて家が回転し、突然、大きな衝撃音と共に屋根が吹き飛び視界が開けた。

たんすの上に乗ったまま沖に向かって流されていた。日が暮れ始めたころ、「多賀丸」という船名の小型船が通った。

「助けてくれー」と叫んだが、コンテナや民家、木とあらゆるものが海に漂っており、「無理だ」という船長の声が聞こえた。

「このまま沖に流されたら終わりだ」と絶望的になった。だが約1時間後、多賀丸は引き返し、ロープを使って救助してくれた。

「信じられない。助かった」。涙をボロボロと流し、何度も「ありがとうございます」と繰り返すと、船長はただ黙ってうなずいていた。

そのまま一晩を船上で過ごした金野さん。夜は一睡もできず、落ち込んでいた。

「命があるだけでいいんだ」「またやり直せばいい」。船長は金野さんを励ましてくれた。

12日夕、金野さんは別の漁船に移り、大船渡湾の東側に上陸。数時間歩いて公民館にたどり着き、避難していた家族3人と抱き合い無事を喜んだ。「助かったのは奇跡。家族と頑張つて、一から生きていきたい」

その二

住民に避難を呼びかけた女性職員

東日本大震災の発生から三日目の13日、明らかに足りつつある被害状況は拡大の一途をたどり、死者が1万人単位に

及ぶとの見方も出てきた。難航する救出作業、あふれる避難所、行き届かない食料や物資。福島第1原発1号機の爆発事故で、新たに約8万人の住民が避難を余儀なくされ、想像を絶する巨大地震に襲われた被災地は、大きな不安や疲労に包まれた夜を迎えた。

「早く逃げてください」。街全体が津波にのみ込まれ約1万7000人の人口のうち、約1万人の安否が分からなくなっている宮城県南三陸町は、町役場が跡形もなくなるなど壊滅した。

多くの町職員や警察官、消防職員が行方不明となったが、その中に津波に襲われるまで防災無線放送で住民に避難を呼びかけた女性職員がいた。

「娘は最後まで声を振り絞ったと思う」。同町の遠藤美恵子さん(53)は、避難先の県志津川高校で涙を浮かべた。

娘の未希(みき)さん(25)は町危機管理課職員。地震後も役場別館の防災対策庁舎(3階建て)に残り、無線放送を続けた。

難を逃れた町職員(33)によると、地震から約30分後、高さ10メートル以上の津波が町役場を襲った。

助かったのは10人。庁舎屋上の無線用鉄塔にしがみついていた。その中に未希さんはいなかった。

遠藤さんは「生き残った職員から『未希さんが流されるのを見た』という話を聞いた。もうダメだと思う」とつぶやいた。

地震直後、遠藤さんの知人、芳賀タエ

子さん(61)は「6メートル強の波があります。早く逃げてください」という未希さんの放送の声を聞きながら、携帯電話だけを持ち、着の身着のまま車で避難所の志津川高校のある高台を目指した。

停電で信号が動いておらず、周辺道路は渋滞していた。高台への道路を上がる時、振り向くと渋滞の列からクラクションが鳴り響き、その背後から津波が家屋などをなぎ倒しながら追いかけてくるのが見えた。

芳賀さんは懸命にアクセルを踏み、数十メートルの高さの高台に逃れた。車を降りて避難所の階段を上がった。

遠藤さんもたまたま避難していた。芳賀さんは遠藤さんの手を握って言った。「娘さんの声がずっと聞こえたよ」

高台から見下ろす街は濁流にのみ込まれていた。

その他にもいろいろ

▽千葉の友達から避難所でおじいさんが「これからどうなるんだろう」と漏らした時、横にいた高校生ぐらいの男の子が「大丈夫。大人になったら僕らが絶対元に戻します」って背中さすっていた。

大丈夫、この国未来あるよ。

▽NHKの男性アナウンサーが被災状況や現状を淡々と読み上げる中、「ストレスで母乳が出なくなった母親が、夜通しスーパリーの開店待ちの列に並んでミルクが手に入った」と紹介後絶句。沈黙が流れ放送事故のようになつた。

すぐに立ち直つただけ泣いているのが分かつた。目頭が熱くなつた。

▽ファミマに行つたら聞こえてきた高校生ぐらいのDQN(悪ガキ)っぽい男子の

会話。

「やべ〜、二百円も募金しちゃつた〜。俺の今月、残り百円もないじゃん。まじ、やべ〜」。無理すんなよ。俺、財布に残つた五百円玉募金したから空っぽだわ、まじ、やべ〜」。

ミサワかと思つたけど、日本終わつてない。

▽旦那さんが自衛官の友人より以前息子さんが「パパは戦争がお仕事？」と涙ながら聞いてきたことがあつたそう。誰かの心ない言葉に傷ついたらんどう。

今、息子さんは毎日テレビ画面に向かい「パパ頑張れ、パパのお友だち頑張れ」と叫んでるって。

そして「ボクも自衛隊になる」って。

▽昨日、韓国ツイッターで話題になつた話。韓国駐在の日本人がタクシーに乗つてお金を払おうとしたらアッサリ拒否されたらしい。「日本人でしょう。帰つたらこの代金を寄付しなさい」と。国籍や政治は別として、庶民の考え方はみんな同じ。

▽停電するとそれを直す人がいて、断水するとそれを直す人がいて、原発で事故が起きると、それを直しに行く人がいる。

勝手に復旧してるわけじゃない。俺らが室内でマダカナーつて言ってる間、くそ寒い中死ぬ気で頑張つてくれる人がいる。

▽都心から四時間かけて歩いて帰つた。歩道は溢れんばかりの人だつたが、皆整然と黙々と歩いてた。コンビニはじめ各店舗も淡々と仕事してた。

ネットのインフラは揺れに耐え抜き、各地では帰宅困難者受け入れ施設が開設され、鉄道も復旧して終夜運転するといふ。凄い国だよ。

GDP何位とは関係ない。